

虹

最期の生き方 問い続け

◎ 全身まひの妻を支えた8年

7時24分、巻子は亡くなった。
 大字ノド25冊目になった「入院日記」。
 今年5月22日、最後の言葉を記したとき、
 松尾幸郎さん(78)＝富山市磯部町三の胸に
 どんな思いが去来したのか。7年11カ月、
 交通事故で寝たきりとなった妻、巻子さん
 (70)に寄り添い続けた。

8年前のきょう、2006年7月1日。富山
 市内の県道で、巻子さんの運転する車と、
 センターラインを越してきた対向車が衝突
 した。相手は19歳、居眠り運転だった。

意識不明の重体。2週間後、奇跡的に意識
 が戻った。しかし全身まひとなった巻子
 さんが動かせるのは唯一、まぶただけだった。
 「意識は引き出さってあげたい。何と巻子
 の言葉を引き出してあげたい」

会話補助機を試みた。文字盤の平仮名が
 光ったときスイッチを押す仕組みだ。全身
 まひの巻子さんに代わり、幸郎さんは、巻
 子さんのまぶたを合図に文字を拾った。

二人三脚で言葉を紡ぐことができた
 とき、事故から2年9カ月がたった。巻
 子さんの声なき声は、幸郎さんには、巻子
 さんの魂が宿った「言葉」に思えた。

やがて衰弱とともに、まぶたきでの会話
 も途絶えがちになっていく。2013年1月5
 日が最後となった。

<あいてはますよ ゆきおさんを>
 幸郎さんとはだ、**「ありがとう」**と繰り返した。

◇
 棺には、ついでに遺ることのなかった真
 摺しい着物が納められた。巻子さんは、俳句
 や茶道などに親しみ日本的女性だった。
 夫妻は2001年に帰国するまで20年間、
 ニューヨーク郊外に暮らした。幸郎さんは商
 社の現地法人社長を務めたビジネスマン。
 巻子さんは不慣れな外国で多忙な夫を支
 え、2人の子供を育て上げた。

引退後に、夫妻は一人の古里である富
 山に戻った。巻子さんが望んだ福国だった。
 その5年後の事故。古里での穏やかな暮ら
 しは一変した。

「毎日が晴れてました」。いつもなら病院
 で巻子さんの傍にで過ごした昼間。一人暮
 らしのマンションにいと、幸郎さんは胸
 に穴が開いたような気がする。

週6日、病院に通った。人工呼吸器や胃
 ろうで命をつなぐ巻子さんの体には、横
 顔ペースメーカーという特殊な機械も埋め

込まれていた。幸郎さんはモニターのさま
 ざまな数値を漏らす入院日記に記録した。
 「巻子の苦しみかゆれるなら、できる
 だけそばにいてやりたい。その一心でした」
 <ゆきおさんを にほんいち あいて
 います>

巻子さんが集中力を振り絞り、まぶたき
 で続いた言葉には、夫への愛情と感謝があ
 ふれていた。「いいにとはたきさんあ
 るたろうにー」。自分への思いを伝えてく
 れる妻が、幸郎さんはいとおかった。

しかし一方で、巻子さんは、人知れぬ深
 い闇に心を抱えていた。
 <しにたいの おねがいします>

◇
 閉じ込め症候群。意識ははっきりして
 いるのに、動くこと、話すこと、意思を伝

講師になった。学校や自動車教習所、看護
 専門学校などや交通事故の恐ろしき、巻子
 さんの病状などを包み隠さず話した。県警
 犯罪被害者支援担当の山崎雄雄さんは言
 う。「公の場で、被害者がその胸の内を語
 るには信念と勇気がいること。妻を支える
 という思いにあふれた松尾さんの話は、多
 くの人の胸に届きました」

年を迫うごとに語り部の回数は増え、口
 元でも依頼が舞い込むようになった。昨年
 は、最初の年の2倍を超える33回。幸郎
 さんは介護の合間を縫い、語り続けた。

講演を終えると、必ず巻子さんに報告し
 た。「みんなしっかり聞いてくれた。涙を
 流す人もいたよ」。二人の体験は決して無
 駄ではない。そう伝えることが、巻子さん
 の心の間に明かりをとすこと信じた。



写真：野上 隆

えることができない。巻子さんはその果
 えない苦しみの中にいた。

生きる希望を持ってほしい。幸郎さんは
 「語り部」となることを決め、巻子さん
 こう話しかけた。「俺はこれから二人の体
 験を大勢の人に伝えていく。だから、もう
 少し俺に付き合ってください。語り部は
 二人だからできるんだ」

二人三脚で言葉を紡ぐことにしよう一
 人、二人の共同作業が加わった。「私たち
 の体験が誰かの役に立つと分れば、生き
 意義を感じてくれる。死にたいという妻に、
 私ができることは語り部でした」

2011年、県警とよま被害者支援セン
 ーが開く「命の大切さを学ぶ教室」などの
 語り部を続けながら、幸郎さんは、生命
 維持装置を頼りに生き、「しにたい」とも
 漏らす巻子さんの「尊厳ある死、を思わ
 ない日はなかった。「自分が先に死んだら
 巻子はどうなるのか」といふ不安も胸の
 中を満たしていた。

幸郎さんは50代、アメリカで「リ
 ビングウィル」を作成していた。不活で死
 期が迫ったとき延命措置は不要なとする
 内容で、日本では「尊厳死の宣言書」「生
 前意思表示」とも言われる。

「医療の進歩で命は長らえても、巻子
 の魂の苦痛は救済されないままなのです」
 多くの人に終末期医療のあり方を考えてほ

しい。語り部の内容もおおすと死を
 めぐる部分が厚みを増していた。

巻子さんが存命中の5月10日。兵庫県
 崎市で開かれた「生と死を考えるフォー
 ーラム」が、二人にとって最後の語り部とな
 った。会場には女優の木内みどりさんの姿が
 あった。病院を離れられない幸郎さんに代
 わっての出演だった。

木内さんは2012年、夫妻を描いたドク
 umentaryドラマ(NHK BS2)で巻子さん
 役を演じた。「女優という枠を超えた得難
 い体験だった」と言う。以来、逆境にあっ
 て絆を結び続けた夫妻に約600人を前に、
 フォーラムに詰めかけた約600人を前に、
 木内さんは時に涙を浮かべながら巻子さん
 の思いを代読した。「尊厳を持って生き、
 老い、そして死ぬ。死は私たちにあって
 最期の生き方ではないでしょうか」

巻子さんを亡くした幸郎さんは、年内に
 も長女夫婦が暮らすアメリカに移住する。
 語り部はもうできないが、木内さんは「ご
 夫婦の思いを伝えていくことは、これら
 の私の大切な役割だと思っています」と語
 す。生死と向き合った夫婦の体験は、これ
 からも語り継がれている。

◇
 寝たきりの妻に寄り添った7年11カ月、
 2度の入院を余儀なくされ、裁判では保険
 会社の払い渋りに心を痛めた。幸郎さん
 自身、すい臓の腫瘍摘出手術を受けた。

それでも前向きに妻を支え、語り部など
 を通して情報発信を続けた。その芯の強さ
 は、日本を行きまじ、異文化に接するなか
 で培われたのかもしれない。

アメリカに移住む前に、成し遂げたい
 日本の最後の仕事がある。介護の傍ら翻
 訳してきた本の自費出版だ。タイトルは「安
 らかなる死を探るまで」。

「巻子は身を持って終末期の在り方を教
 えてくれました。この本が、尊厳ある死を
 考える上で指針になること信じてます」。
 本は600ページを超える大著となる予定だ。

<にほんいち あいています>
 巻子さんの声なき声は、いまも幸郎さん
 の耳にこだましている。

松尾さん夫婦については、2012年8月1
 日付「虹」で書かされていた。取材が
 終わったからと幸郎さんから、巻子さんの
 言葉や写真の複製の考えなど、たてさん
 のメールが送られてきた。幸郎さんの
 情熱を支えていたのも信じています。

虫? 「虹」シリーズ第3巻 発売中
 第3巻は、北日本新聞連載の41
 ～60回までの20部分を収めています
 定価 1冊1080円（税込）
 北日本新聞ウェブ上のホームページの
 「虹」1・2・3のコーナーを
 クリックすると、ウェブブックから
 20部分を読むことができます。

〒933-0911 高岡市あわら町13-50
 北日本新聞社高岡支社「虹」編集部
 FAX 0766-25-7773
 次刊掲載は8月1日(金)です。

販路提供/人と鉄のあいだに
 OTANI 大同印刷株式会社
 企画・制作/北日本新聞社営業局